博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　野平　宗弘　　印

学位申請者　NGUYEN GIA THOAI DU （グエン ヤ トーアイ ユー）

論　文　名　日本語母語話者によるベトナム語の量化表現の習得：
コーパスに基づく実証的研究

■本論文の概要

本論は，ベトナム語の量化表現に焦点をあてた，ベトナム語学習者（日本語母語話者）を対象者とした第二言語習得研究である。具体的に，量化表現として，(1) 数量詞を含む名詞句（物事の数え上げ方の）表現と (2) アスペクト助詞を含む動詞句（出来事把握における時間認識の）表現を取り上げている。本論の分析手法の特徴は，(i) 先行研究の詳細な分析から第二言語習得過程において，どのような要因が言語学習上で教育的介入の対象となり得るのかを明らかにしたこと，(ii) 名詞句表現の分析では，数量詞と名詞の結び付きのモデルとして単複形態素の選択構造モデルを提示していること，(iii) 動詞句表現においては，継起する事象間の時間的配置と発話時点との関係モデルを示していることである。

そして，2 つのモデル（仮説）を，十分な規模の学習者コーパス（母語話者コーパスも含む）とベトナム語大規模コーパスを使い，学習者と母語話者の間に有意な差があることを複数の統計量を根拠として実証的に検証することで，学習者が過少使用する数量詞と過剰使用するアスペクト助詞を特定することに成功し，学術的貢献度の高い成果を挙げている。この量的分析とともに，誤用箇所の表現分析や学習者への聞き取りを通じた質的分析も併せて，客観的説得性を背景に教育的介入が可能な要因に深く関係する項目を解明している。

仮説演繹的アプローチに基づいた，再現性を確保した方法論のもとで実測データから結論を導き，再現性と可読性のある考察を行うという立場を本研究は採っており，外国語教育研究への方法論的な貢献の観点からも学術的意義のある研究である。

(1) の量化表現は，数量詞 một（単数）と những/các（複数）を含む名詞句であり，(2) は，アスペクト助詞 đã/sẽ（現実性/非現実性）と進行性を表す đang を含む動詞句である。これら接辞の選定の理由は，先行研究で言及されてきた点に加えて，ベトナム語テキスト（95,630,580 文，本論 96 頁）において高頻度で出現する重要な形態素であることによる。後者は，著者が実証的に確認したもので，言語学的な成果としても極めて興味深い。表 1

にその結果を本論から引用して示す。

表 1 モノゴトの量化に関わる形態素とその出現率

項目	形態素	頻度	順位	出現率（%）
数量詞	các	876,939	6	0.917
	một	756,291	8	0.791
	những	478,336	17	0.500
アスペクト助詞	đã	629,507	13	0.658
	sẽ	290,781	38	0.304
	đang	171,926	91	0.180

(i) の成果は，第二言語習得過程における最終的習熟度の概念及び，それに影響を及ぼす要因群に関する実証研究（先行研究）を整理し，評価軸を導入してまとめたものである。具体的に，可変性（固定的要因／可変的要因）と要因の所在（学習者内面の要因／外要因）という二つの軸からなるマトリクス表を設け，最終的習熟度に関与する要因群を分類した。分類された要因は，言語間の距離（固定性／外的），言語適性（固定性／内的），言語年齢（固定性／内的），インプット（可変的／外的），学習環境（可変的／外的），動機づけ（可変的／内的）である（本論 16 頁）。

(ii) は，述語論理に基づく意味論（主に参照可能性）を参考として，認知的な範疇論（現実世界にある事物の指示枠組み）を導入し，名詞に属性（±定性／±特定性）を設け，その属性との共起関係から単複形態素の選択構造モデルを提案している（本論 89 頁）。ベトナム語の数量詞－単数を表す một と複数を示す những/các を取り上げ，これら数量詞が，指示対象の定性および特定性を示す手がかりであること，表現対象のモノ表現が集合論的な意味（個別か群か）に関わることを説明している。

(iii) の継起する事象間の時間的配置と発話時点との関係モデル（本論 68 頁）は，指標性と象徴性に関係する認知心理学的な時間概念の把握の考え方を基礎にしている。「時間の知覚と言語表現」（本論 54 頁）を設け，（その物理的な存在が確認されていない）時間という概念の物理的・心理的認識の枠組みを幾つか示し，「心理時間における言語表現は言語集団ごとに異なり，それゆえに，語彙的手段や文法的体系における時間表現の選択に明確に現れる」（本論 47 頁）ことを確認している。この確認の後，「ベトナム語における時間の表現」（56 頁）で，ベトナム語のアスペクト助詞の一覧とその表現機能の役割を説明している。現実性に反応する（現実と非現実を分ける）こと，相対的な時制の枠組みを持つことを豊富な用例を挙げて明らかにし，現実性に反応しない日本語との違いや，同じ相対的な時制の枠組みを持つことが示される。

上記の(ii)と(iii)は，本論の 4 章と 5 章で，それぞれ定量的な分析と定性的な分析を通じ

て確認され，冒頭で示した成果が得られている。

■本論文の構成

本論文は 7 章から構成され，213 頁の論考に加え，教材化支援のための資料が付録（56 頁）として添付されている。以下，各章の概要を示す。

第 1 章では，本研究の研究対象の概要を示したうえで，問題設定，研究目的，方法論および論文全体の構成を提示している。まず 1.1 節で，量化表現を定義し，ベトナム語における裸名詞句の意味解釈が文脈や数量詞に依存することを述べ，その上で，各数量詞 một/những/các が，名詞句の定性や特定性といった意味解釈において重要な役割を果たすことを説明している。さらに，量化が事象構造にも関与する点を指摘し，名詞句の量化と事象の完結性との関係を整理するとともに，アスペクト助詞 đã/đang/sẽ の意味機能と用例を挙げている。これらを踏まえ，ベトナム語の数量詞とアスペクト助詞を量化表現として統一的に捉える立場を示す。1.2 節で研究目的を述べた後，1.3 節では，誤用分析およびコーパス言語学といった関連分野を包括的に検討し，本研究の方法論の位置づけが概説されている。最終節では，本論文の全体構成と各章との対応関係が示され，論考の全体像が明示されている。

第 2 章は，第二言語習得過程における最終的習熟度の概念およびそれに影響を及ぼす要因群に関する実証研究が整理され，どのような要因が，言語教育において教育的介入の対象として扱いやすいのかを明らかにする。2.2.2 節では，可変性（固定的要因／可変的要因）と要因の所在（学習者内側の要因／外要因）という二つの軸からなるマトリクス表を設け，最終的習熟度に関与する要因群が整理されてる。具体的には，言語間の距離（固定性／外的），言語適性（固定性／内的），言語年齢（固定性/内的），インプット（可変的／外的），学習環境（可変的／外的），動機づけ（可変的／内的）の各要因が挙がっている。教育実践の観点から，アウトプットを伴う活動が加わる良質のインプットの提供と，自律性を支援する活動が，最も介入しやすく効果的なアプローチであると結論づけられている。

第 3 章では，数量詞 một/những/các とアスペクト助詞 đã/đang/sẽ に関する先行研究を整理し，それぞれ名詞句および動詞句の解釈に与える意味的側面を検討し，本研究の理論的基盤を明確にした。3.1 節でアスペクト助詞に関する先行研究を概観した。3.1.1 節では，時間の知覚と言語化に関する議論を整理し，著者はベトナム語が時制という文法範疇を欠く言語であるため，出来事の時間的位置づけは，文脈，直示表現，およびアスペクト助詞の相互作用によって決定されることを指摘している。この立場から，đã は基準時点における事象の成立（realis）を示すが，完結性を直接規定するものではなく，sẽ は非現実性（irrealis）を担い，条件文や意志表明などの特定の構文で用いられることになる。đang は基準時点における進行相を表し，終点を含意する述語との共起には制約があることも示さ

れている。3.2 節では，数量詞 một/những/các を中心に，名詞句の指示解釈に関する先行研究が紹介され，một は不定（新情報の文脈）を示す機能をもち，特定性は文脈や修飾語に依存すること，一方，những は文脈依存性が高く，部分集合や対比を伴いやすいのに対し，các は基本的に既知の集合全体を前提とすることを説明している。これらの数量詞を素性（±定性，±特定性）制約の観点から整理し，名詞句の解釈が，数量詞，類別詞，裸名詞，指示詞といった要素の組み合わせによって構成されることを明らかにしている。

第 4 章は，コーパスに基づく定量的な分析を説明する。使用したデータは，作文コーパス（一次データ）とベトナム語大規模コーパス（二次データ）である。まず，作文コーパス（4.3 節）の分析結果として数量詞の使用頻度を検討している。「một + NP（単数）」および「những + NP（複数）」のいずれにおいても，日本語を母語とするベトナム語学習者の平均使用頻度は，ベトナム語母語話者を有意に上回っており，ベトナム語学習者における過剰使用が示唆された。アスペクト助詞の使用頻度からは，「đã + VP（現実性）」では，ベトナム語学習者の平均使用率が母語話者を大きく上回った。一方，「sẽ + VP（非現実性）」については，ベトナム語学習者の平均使用率が母語話者を下回り，学習者において使用が相対的に少ないことが明らかとなった。

ベトナム語大規模コーパスに基づく数量詞の分析（4.4 節）では以下の結果が提示された。

(1) 頻度分析に基づく những と các の分布は文章ジャンルによって大きく異なる。フィクション（文学作品）では những が優勢であるが，ノンフィクション（ニュースや百科事典）では các の頻度が những を上回る傾向がある（仮説）

(2) 対数尤度（Log-Likelihood）値に基づく相関分析では，một と những の共起語の間に中程度の正の相関（$r = 0.585, p < 0.001$）が認められた。これに対し，một と các，および những と các の間には有意な相関は確認されなかった。これは，những と các が後続する名詞の分布が異なることから，両者が異なる意味機能を担っている（仮説）

第 5 章では，テーマ作文とストーリーライティングの二種類のタスクを分析対象として産出された文章の質的分析が行われる。5.2 節では，ベトナム語学習者 30 名が産出した作文データ（n=30）を対象に不適切な使用を調査した。その結果，特定の構文において複数の不適切な表現が確認されている。具体的には，現実性を示す đã に関しては，時間従属節，叙述文，反実仮想・条件文（nếu ～ thì）において不適切使用が確認されている。非現実性を示す sẽ に関しては，願望動詞の補文および否定文，数量詞に関しては，繋辞文（NP1 là NP2），最上級構文，類別詞構文，および指示的に透明な文脈で不適切な使用があったという。

5.3 節では，ストーリーライティング課題を用いて，視覚情報が共有された状況下で作文を行う際に，名詞前の数量詞 một および動詞前のアスペクト助詞 đã/đang の使用度数（絶対頻度）をベトナム語母語話者とベトナム語学習（L1/L2）の間で比較している。著者の分析によると，両者で，một については，新情報導入場面であっても付加されない例が多く，「新情報である名詞には một が付く」という仮説は支持されなかった。これは，書き手と読み手が視覚情報を共有する「共視」状況では，対象が新情報として認識されにくいためと推測されるという。進行性を表す đang は L1/L2 ともに使用度数が低く，任意に使用される傾向が示された。一方，đã の使用度数には L1/L2 の間で大きな差は見られず，両群は概ね類似した使用傾向を示している。

第 6 章では，文中におけるアスペクト助詞および数量詞の有無がもたらす容認度の違い（文章の自然さ）を，学習者がどのように判断するのかについて，容認性判断課題（AJT）を用いた実験的設計によって検証している。この課題は 14 問から成る二択式（はい／いいえ）で構成され，ベトナム語学習者群 38 名，およびベトナム語話者群 30 名を対象に実施された。独立性を仮説として，t 検定を使ってベトナム語学習者群とベトナム語話者群の正答率の差を検証したところ，有意な差が確認されている。さらに，L2 学習者は容認性の高い文に対しては比較的高い正答率を示した一方，容認性の低い文では正答率が著しく低くなる傾向が確認された。次に，L2 学習者の正答率にどのような要因が影響を及ぼすのかを検討するため，正答率を被説明変数，刺激文のタイプ（容認性の低い文/容認性の高い文）および学習年数を説明変数としてロジスティック回帰分析を行っている。その結果，刺激文のタイプ（$\beta = 0.827$，$z = 4.610$，$p < .001$）および学習年数（$\beta = 0.192$，$z = 2.275$，$p = .023$）が正答率に有意な影響を及ぼすことが確認された。

第 7 章では，本研究の各章の内容および分析結果が総括され，得られた学術成果（日本語母語話者のベトナム語学習における数々の知見）と，今後の課題が述べられている。

付録には，定量的分析で用いた処理済みデータ（付録 A～D），学習者のフェースシートとその記述統計（付録 E・G），容認性判断テストの質問項目とその回答の詳細（付録 E・F）が挙げられている。付録 C・D には，大規模コーパスを通じて抽出した高頻度の共起語群が掲載されており，今後の教材開発のための有用な資料となっている。

■本論文の評価と問題点

評価すべき点

本研究は，認知的なアプローチを基に提案した解釈仮説と，仮説演繹的アプローチに基づいた，再現性を確保した方法論のもとで実測データから結論を導き，再現性と可読性のある考察を行うという立場を採っており，ベトナム語学習者（日本語母語話者）の学習データとベトナム語母語話者の産出したデータに基づく比較対照を定量分析と定性分析の両

面から行っていることを特徴としている。

そして，2 つのモデル（仮説）を，十分な規模の学習者コーパス（母語話者コーパスも含む）とベトナム語大規模コーパスを使い，学習者と母語話者の間に有意な差があることを複数の統計量を根拠として実証的に検証することで，学習者が過少使用する数量詞と過剰使用するアスペクト助詞を特定することに成功し，学術的貢献度の高い成果を挙げている。

さらに母語話者と学習者に対して実施した容認性判断テストは，文の容認性の違いを比較するだけでなく，容認の判断の根拠を質的に調査するもので，その成果は母語話者と学習者の学習過程の違いを詳らかにしている。一般に誤用分析は，文章内の本物の（authentic）表現に対する実際の表現との「差の所在」を手掛かりとするが，学習者が産出する文章だけでなく，ベトナム語母語話者による作文データも収集することで，より妥当性のある結果を得ることを目指している。これは第二言語習得研究に於いて本研究が独創的な位置を占める点でもある。

本論文は，量化表現の産出の背後にある概念把握の考え方（理論・仮説）を提示していること，産出された言語表現の定量分析と定性分析を併用すること，さらに言語表現の容認性テストを通じて，実際の（actual）言語使用の有様にも目を向け，それらを相互に関係させながら比較分析することで，より正確な学習行為と達成水準の関係を明らかにしようとする。十分な実験規模を確保して仮説の実証的な検証を行い，検証された仮説，反駁された考え，新たな知見の提示など豊富で質の高い成果を挙げている。

個別の項目では，習熟度要因の分析（「最終到達度に影響を与える要因のマトリクス」，本論 16 頁）は，先行研究の整理をもとに，学習者心理過程への参照もあり，言語教育の実践の観点からも参考になる。

問題点

文章記述において若干の形式上の問題点が指摘された。すなわちグロスの略称名「POSS」の記載がなかったこと，グロスの付け方，参照先の誤りや言語学でよく使われる概念（新情報や情報構造など）の定義が明示されていないなどの点や，各章の関連性の記述が不足しているといった点である。

また，大規模コーパス調査における動詞のアスペクト助詞の分析・調査結果が本論内で十分言及されていなかった。アスペクト助詞 đã に後続する動詞群に規則性が見いだされないことも明らかになった事実であり，この事実も明示しておくと良かった。また大規模コーパスを使った量的調査の結果ではあるが，文章ジャンルの影響についてもさらに考察を進める必要があろう。

本論文のアスペクト助詞の定性分析説明の中で「進行中の局面へ誘導する」（本論 76 頁 11 行目）という表現がある。これは著者の意見として書かれているが，同様の主張をする

研究が注目されている。この点については近年の先行研究を踏まえた上で，さらに考察を深めるべき点である。

日本語も数量詞があるが，数詞「一」に，いわゆる不定冠詞的な集合の一要素を表す役割は乏しく，日本語母語話者にとってベトナム語の một , những , các の習得が難しいことを予測として説明もできる。日本語の特徴からの説明があっても良かった。

学習者コーパスは 2 つの大学で収集されている。それぞれの大学の教育課程は異なる可能性がある（母集団特徴に影響が在る可能性がある）。容認性判断テストの学習者コメントの分析にも関わると思われる。今後の検討課題として探求してもらいたい。

また，容認性判断テストにおいて母語話者と学習者の回答結果に違いがあまりみられない項目がある。判断テストは，刺激に対する反応として回答を求めるものであるから，学習者から得られるべき反応の性質については，十分検討したほうがよい。

量的分析で母集団としての傾向性を把握することは勿論必要だが，個々の学習者によって産出された（誤用を含む）文の質的な分析を精緻に行うとよい。その際，言語性質（ベトナム語と日本語）にもっと焦点をあてるべきで，ベトナム語の知識，日本語の知識の対照研究を深め，両言語の質的な違いを意識して，教材資料として活かす項目や観点を指摘するとよい。

■最終試験の審査と結論

公開審査は，2026 年 3 月 11 日（水），午後 1 時 30 分から午後 3 時 40 分にわたり本学・留学生日本語教育センター棟・308 室に於いて実施された。審査では，はじめに著者から研究成果について概要が述べられ，その後，各審査委員との間で質疑応答が行われた。

仮説演繹的アプローチに基づく再現性を確保した方法論のもとで実測データから結論を導いたこと，定性分析を併用し，学習過程への介入可能な項目を示したことなど，ベトナム語教育に於いて学術的意義のある研究である。漢越語に関わる越日の比較研究は多いが，数量詞を扱う研究は少なく学術的価値が高い。各章とも記述の密度が高く，且つ，緻密な検討と構造的な分析の論考を表現する日本語（外国語）で書かれている点などが高く評価された。なお審査の過程では新情報や情報構造などよく使われる語の概念定義を明確にすることなどを指摘した。審査委員が質疑において，過剰使用するアスペクト助詞はデータから特定できたが，逆に過少使用する助詞の分析可能性をについて尋ねたところ，データに無い部分を定量的なアプローチで特定するのは難しいこと，この問題に対処するには例えば，誤用タグ付きコーパスを利用すればよいが，全文をチェックしながら作成するので多大な労力が必要であることが説得的に説明された。以上のような問題点で挙げた点についても真摯な返答があり，今後の研究の進展に期待が持てる応答であった。以上，論文審

査および最終試験の結果から，審査委員会は全員一致で，本学の博士論文の水準を申し分なく満たすものであると評価し，NGUYEN GIA THOAI DU 氏に本学博士（学術）の学位を授与する結論に至った。